＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.137 2011 2月号

大月人物伝　山峡の地 瀬戸の道を開く　大石 太左衛門

大月市七保町の小金沢山を水源とする葛野川と雁が腹摺山を水源とする奈良子川の合流する地点から奥に入る瀬戸地域は川を挟んで急峻な山からなる狭隘な地形である。その距離は二十キロメートルにも及んでいる。しかしながら瀬戸地域の歴史は古く、天皇の都である京都に対して関東の天皇を名乗り君臨していた平将門が亡くなったのは西暦九百四十年で平安時代の中期前半になり平将門の子供とされる平常門が駒宮地域に隠遁してきたのは九百四十一年とされている。それからしても千年以上の古い歴史をもつ地域であり、またその急峻な地も往古より秩父方面へ往来する秩父往還道として、かっては佐野峠、松姫峠、鶴峠を通って秩父道にまた江戸道に通じる街道であった。また江戸時代に入ってから富士講が盛んになり江戸道、また秩父道を通って瀬戸の山峡の道を行きかい上和田部落には富士講者を泊める宿坊があった。江戸の民衆が競って富士山に向かう瀬戸道は大層な賑わいであったと推測される。その賑わいは明治三十六年の中央線の東京、甲府間の開通をもって様相が変わったが、小金沢の原生林から伐採・搬出されたケヤキ、シオジ、ツゲブナ、ミズナラ等の木材はその優れた高質な木材として高く評価され長い間地域経済を潤して来た。

さて、その狭隘なしかも急峻な土地の下瀬戸から上和田までの総延長八キロメートルを今までの狭い道を拡幅し又新道を開削する工事に果敢に取り組んだ人物がいた。それは大石太左衛門という人である。太左衛門は瀬戸の中程の井戸地部落より上に三百メートルも登った麓山という部落で「上のこっち」という屋号で呼ばれている大石家である。大石家は代々名主を務め現在の戸主大石芳治氏で十六代の系図のある地域の立派な家柄である。太左衛門は天保四年（一八三四年）生れで死亡は明治二十三年（一八九一年）享年五十七歳であった。

大石太左衛門を大世話人とする道路の工事は平坦地は少なく、その難工事たるや上吉平、吉平間のカワラザス、草木間のシンドウ沢、草木井戸地間のナガレ、オモレ、中風呂のイシガミド等切り立った険しい崖だらけのそれはそれは筆舌に尽く難い難工事であったと思われる。その難工事は明治十年頃より山梨県の指導のもとに突貫工事が地域住民の努力により進められ、一応の完成を見たのは明治二十四年で十余の歳月を経た難工事であった。その後も幾度となくさらなる拡幅工事及び整備がされて今日の道路になったのである。

道路開削に係る収入支出の明細簿を見ると瀬戸組有志、駒宮組有志、西原村有志、小菅村有志、浅川組有志、賑岡村有志等の多額な寄付金が記されている。その中にあって西原村有志、志の寄付金が大変多額の金額で記録されている。要するに瀬戸道は明治・大正・昭和、西原村、小菅村の人々にとって佐野峠、松姫峠を越えて往来する街道であった。

また佐野峠は昭和三十年代まで車の通行ができない県道と言われていた。なにしろ明治も遠きにありで現在の当主大石芳治氏にとっても太左衛門は吉太郎、福文、芳貞、芳治と五代前になり百二十年前に遡るわけであり家族にとっても先祖の言い伝えも乏しく、しかしながら太左衛門を大世話人とする道路開削工事は寄付金の調達、土地交渉等その労苦は尋常では無かったことは推測される。

親族の話を伺う中で太左衛門が土地を提供しなければならない人達から罵声をあびせられたり、石を投げられたりの抵抗にあって、それまでの苦労をしてまでという家族の話しの中にあっても太左衛門は人は一代で終わるが名は末代まで残るといって家族の意見を聞き入れなかった。その意志たるや部落の人々の経済的、生活環境の向上のためにその信念に燃えたぎった太左衛門の生き様を想像するだけで感謝の気持ちがわいてくる。

道路開削の難工事を進めるにあたって太左衛門は名主をしていた家柄で瀬戸地域に多くの土地を所有しており親戚も多く上平、吉平にも大石家の分家があることからしても推測できる。そして土地の提供及び交渉に全身全霊で傾注した。ともあれ私達が日常なにも思わず当たり前に車で通行している道路も長い歴史の中でこうした太左衛門や世話人をはじめとする大勢の地域に根ざした先達の人々の労苦があったことを忘れてはならない。

大石太左衛門の顕彰碑（金龍寺入口）

大石太左衛門顕彰碑刻印
道路大世話人
大石太左衛門塔
瀬戸中
裏面
明治廿四年十一月珠日
有志総代（道路世話人）
相馬兵蔵　現当主　相馬大氏
相馬重兵衛　〃　相馬栄明氏
大石源左衛門　〃　大石源廣氏
蔦木甫高　〃　蔦木正彦氏
□□□□□□□□□□
資料提供　親族

執筆者　山口善久
協力者　滝川力三